

「カキ料理は広島が本場だ」構文への認知文法的アプローチ

氏家啓吾・田中太一

keigo5525@gmail.com t.tanaka6002@gmail.com

キーワード：認知文法 カキ料理構文 非飽和名詞 参照点フレーム メタ概念化

要旨

「カキ料理は、広島が本場だ」「この芝居は、洋子が主役だ」という形の文はカキ料理構文と呼ばれる。この構文に関して、Z の位置の名詞が非飽和名詞（「～の」という要素（パラメータ）を意味的に要求する名詞）であり、X がそのパラメータである場合に限り成立するとする西山（1990, 2003）の説が影響力を持ってきた。しかし反例も多く指摘されている。本論文は認知文法の立場から、この構文の意味的特徴と、非飽和名詞と呼ばれてきた名詞の性質を考察するものである。あるものを介して別のものにアクセスする能力を参照点能力という。本論文では、カキ料理構文においてトピック X が「Y が Z だ」の表す事柄への参照点となっており、文全体は、X からアクセス可能な知識領域において限定的に成り立つものとして「Y が Z だ」の表す事柄を提示するものであると主張する。非飽和名詞と呼ばれてきたものはフレームの中の役割を指すという共通点を持つため、X がフレームの事例を特定する手がかりとして働いていると考えれば、この種の名詞がカキ料理構文ときわめて相性が良いことを説明できる。また、西山自身が「例外」として挙げている（幼い子供が何かをヴァイオリンに見立てている状況を指して）「洋子は、これがヴァイオリンだ」という事例は、他者の視座を参照点としてその信念内容を述べるものと分析することができる。このように考えることで、例外的な事例も上記の一般化により統一的な説明を与えられることを示す。

1. はじめに

日本語の名詞句 X を主題とした「X は、Y が Z だ」という形の構文のうち、(1) に挙げるタイプのもは「カキ料理は広島が本場だ」構文（以下、カキ料理構文）と呼ばれる。カキ料理構文の特徴は、(2) に挙げる「Y が、X の Z だ」という形を持つ指定文と呼ばれるコンピュータ文との意味的な対応関係がある点である¹。

- (1) a. カキ料理は、広島が本場だ。
- b. この芝居は、洋子が主役だ。

¹ 指定文は、(2) のように「本場はどこかという、それは広島だ」「主役は誰かという、それは洋子だ」などと言い換えられるような、問いとそれに対する答えに相当する意味的關係を1つの文で表すコンピュータ文である。「X が Y だ」の形式（「あの男が犯人だ」）と語順を入れ替えた「Y は X だ」の形式（「犯人はあの男だ」）の両方が可能であるという特徴を持っている（後者の形式は特に倒置指定文と呼ばれることもある）。

- (2) a. 広島が、カキ料理の本場だ。
b. 洋子が、この芝居の主役だ。

カキ料理構文の意味と成立条件をめぐって、これまで多くの研究がなされてきた（野田 1981, 西山 1990, 2003, 坂原 1990, 菊地 1997, 庵 1995, 三宅 2000, 山泉 2010, 西垣内 2016 など）。本論文は認知文法の立場からこの構文の意味を考察するものである。

この構文に関して問題となってきたのは、「Y が、X の Z だ」という指定文が、いつでも (2) のような X を主題とした文に言い換えられるわけではない点である。たとえば次の (3a) のコピュラ文は、意味を保ったまま (3b) に言い換えることができない。

- (3) a. これが、娘の首飾りだ。
b. ? 娘は、これが首飾りだ。

西山 (1990, 2003) は、「非飽和名詞」と呼ばれる特別な種類の名詞が関わっていると考えることで、この事実を説明しようとした。非飽和名詞とは、「X の」というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延 (extension) を決めることができず、意味的に充足していない名詞」のことである (西山 2003: 33)。たとえば「主役」について言えば、ある人が主役かどうかは「どの芝居 (や映画) を問題にしているかを定めないかぎり、なんともいえない」(西山 2003: 33)。西山は、カキ料理構文「X は、Y が Z だ」の成立条件 (の 1 つ) は、Z と X の間に非飽和名詞とそのパラメータの関係が成り立っていることであると主張した。(1) の例では「主役」や「本場」は非飽和名詞であり、「この芝居」「カキ料理」がそのパラメータの値となっているがゆえに、カキ料理構文が成立する。一方、「首飾り」については、「誰の」といった要素を必要としないことから、非飽和名詞ではない (飽和名詞と呼ばれる)。このため、(3b) のカキ料理構文は不自然になるのだと説明された。

しかしながら、この一般化の反例とみなしうる例が、西山自身によるものも含めてこれまで多数指摘されてきた。例えば、職業を表す名詞「ピアニスト」は、ある人がピアニストかどうかは「何の」といった要素を必要とせずに決まるため、飽和名詞であるとされるにもかかわらず、次のようなカキ料理構文が可能である。

- (4) このジャズバンドは、太郎がピアニストだ。 (西山 2003: 308)²

また、菊地 (1997) は、「私はこれが机だ」は通常成り立たないが、たとえば貧しい作家がみかん箱を指しながら発話したと想定すれば (5) のカキ料理構文は成り立つと指摘している。西山自身も飽和名詞「ヴァイオリン」が用いられた (6) について、通常の文脈では容認されない (そのため「?」が付されている) ものの、若い洋子が板切れをヴァイオリンに見立てて遊んでいる

² この例文は山泉実氏によるものであることが西山 (2003: 319) に注記されている。

状況など、文脈によっては容認可能になると述べている（ただし、その状況を想定しても容認できないと感じる話者も多いようである）。

(5) 実は、私はこれが机なんです。[貧しい作家がみかん箱を指して] (菊地 1997: 98)

(6) a. これが、洋子のヴァイオリンだ。

b.? 洋子は、これがヴァイオリンだ。 (西山 2003: 299)

以上は非飽和名詞ではない名詞がカキ料理構文の Z の位置に現れている例である。一方、Z の位置に西山のいう非飽和名詞が使われていたとしても、X がそのパラメータの値を表していない事例も存在する。「犯人」は西山のいう非飽和名詞であるが、事件をパラメータにとるとされており、「次回の『古畑任三郎』」はそのパラメータの値とは認められない。けれども次のカキ料理構文が可能である。したがって、X と Z の間に西山のいう非飽和名詞とそのパラメータの関係が成り立っているとは言えず、西山の一般化に反している。

(7) 次回の『古畑任三郎』は、松嶋菜々子の演じる人物が犯人だ。

以上のような事実を考慮すると、非飽和名詞という概念に基づく西山 (2003) の一般化をこのまま維持することは難しいように思われる³。

本論文では、カキ料理構文の特徴づけに飽和名詞・非飽和名詞という語彙のレベルでの二値的な指定は必要ないと論じる。カキ料理構文「X は、Y が Z だ」は、主題名詞句 X を参照点としてアクセス可能な領域で限定的に成り立つこととして「Y が Z だ」という事柄を提示するという特徴を持つ。この見方のもと、非飽和名詞と西山が呼ぶ名詞類が共通して持つ特徴をフレームの観点から考察することで、この種の名詞がカキ料理構文ときわめて相性が良いということだけでなく、以上の例のようにそれ以外の名詞がこの構文に現れる場合があるという事実も説明できることを示す。そのような場合の一つが (5)・(6) のような例であり、これは他者の視座からの見えを概念化する「メタ概念化」が関与する例として説明できる。

構成は以下の通りである。第 2 節で、本論の分析に重要になる認知文法の参照点という概念を紹介し、トピックとの関連を述べる。第 3 節では、西山のいう非飽和名詞をフレームに基づいて特徴づける。第 4 節では参照点を使ったカキ料理構文の一般的な意味構造の分析を提示し、非飽和名詞が使われる例と飽和名詞が使われる例の両方を扱えることを示す。第 5 節では、上記の例文 (6) のようなメタ概念化が関わる例から、カキ料理構文に反映された他者の心の概念化のあり方を考察する。第 6 節は全体のまとめである。

³ なお、非飽和名詞とされるものの中にもカキ料理構文の Z の位置に現れづらい名詞があることは西山 (2003) も認めている（つまり、Z が非飽和名詞であることはカキ料理構文成立の必要条件であって十分条件ではない）。カキ料理構文の全体像の解明にはそうした例の分析が不可欠であるが、本稿は、Z の位置の名詞が非飽和名詞ではないにもかかわらずカキ料理構文が成立する例を主な考察対象とする。カキ料理構文に生起する非飽和名詞と生起しない非飽和名詞との違いについての考察は丹羽 (2020) に詳しい。

2. 参照点

2.1 視座、視野、注目対象

認知文法は意味の本質は概念化にあると考えている。したがって言語表現の意味を適切に捉え、語彙や文法のさまざまな側面を理解するためには、概念化の基本的な特徴を考えることが不可欠である。概念化は見ることになぞらえて整理することができる。見ることの基本的な構造は以下のようなものである。ある位置からは特定の範囲が見える。この観察の原点を視座といい、そこから見える範囲を視野という。多くの場合、その視野の中の一定の範囲に注意が向けられ、さらにその中の特定の対象が注目される。このとき、観察者自身の姿はほぼ視界に入らず注目されないという主体・客体の非対称性がある。

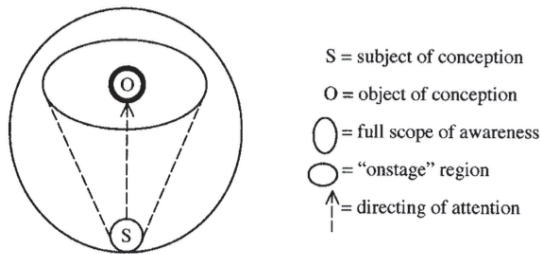


図1 概念化の基本構造 (Langacker 2008: 260)

観察者のあり方が見え方を決定しているにもかかわらず観察者自身は注目されないという事実を反映して、概念化の主体を担う話し手・聞き手は言語表現によって明示的に描写される概念化対象の舞台には上らないことが多い。

2.2 参照点関係

遠くにいる猫に注目してもらいたいが単独では見つけにくいという場合、いったん猫の横に立っている木を指さし「あの木の下に猫がいるじゃないですか」などと言って、それを介して猫を見てもらうことがある (西村・野矢 2013)。このように、あるものを介して別のものにアクセスする能力は参照点能力と呼ばれる。ここでの木に当たる、手がかりとして注目される対象を参照点 (reference point) といい、それを介してアクセスされる対象を標的という。そして、参照点を介することでアクセス可能になる領域 (すなわち潜在的な標的の範囲) を支配領域 (dominion) という (Langacker 1993)。

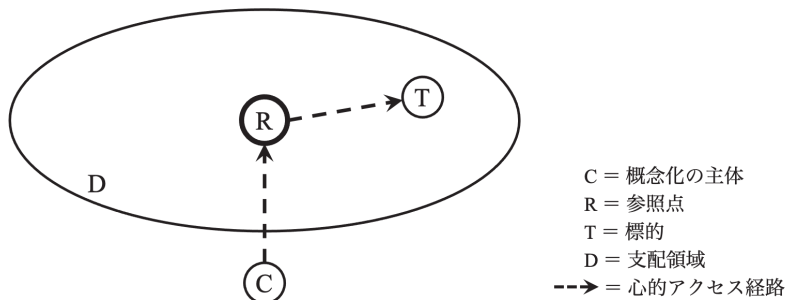


図2 参照点・標的・支配領域の関係 (Langacker 1993: 6 を参考に作成)

Langackerによればこの一般的（特定の領域に限られない）心的能力は、諸言語の所有表現や照応、メトニミー、主語、そしてトピック構文など様々な言語現象の背後で働いている。たとえば、*my watch*、*the dog's tail*、*the book's weight*、のように、英語の所有表現 X's Y の表す関係は幅広いが、それらの共通点は所有者を参照点として所有物にアクセスするという参照点の関係が成り立っていることだと考えることができる（Langacker 1993）。たとえば、犬のしっぽ単独よりも犬そのものの方が最初に注目しやすいことを考えれば、*the dog's tail* は参照点を經由した概念化を表す表現として無理なく理解できる。さらに、一般に身体部位名詞の逆に当たるような名詞が存在しないこと（つまり、X's Y の X に自身の部分を要求して全体を指すような関係名詞 Y が存在しないこと）は、この認知的な非対称性から説明できるのである（Barker 2011: 1125）。

参照点と視座の関係を考えよう。参照点は注目対象であると同時に、概念化の主体によるアクセスの経路の一部でもあるから、参照点と視座はきわめて近い関係にある（たとえば、単独で「妹」と言った場合話し手の妹のことであると解釈されやすいことはこのことの反映である（Langacker 2015））。視座から離れた対象を参照点として利用することは、そこに仮想的に視座を移すことでもある。参照点は視野の中の最初の注目対象であるが、それを介して何かへとアクセスする段階では仮想的な視座としての役割をも果たしている。このとき、その参照点を介してアクセス可能な領域は、そこに視座を移すことで開かれる新たな視野として立ち現れる。

2.3 参照点としてのトピック

トピック構文も、参照点という概念が提案された当初から参照点関係によって特徴づけられると考えられてきた現象の一つである（Langacker 1991: 314, Langacker 1993: 24, Kumashiro and Langacker 2003）。X's Y のような所有表現ではモノが標的であるのに対して、トピック構文では次の図のように、節の表す事柄（命題）が標的となっている。T と記された長方形は、円と矢印が標的としての事柄であることを表している。

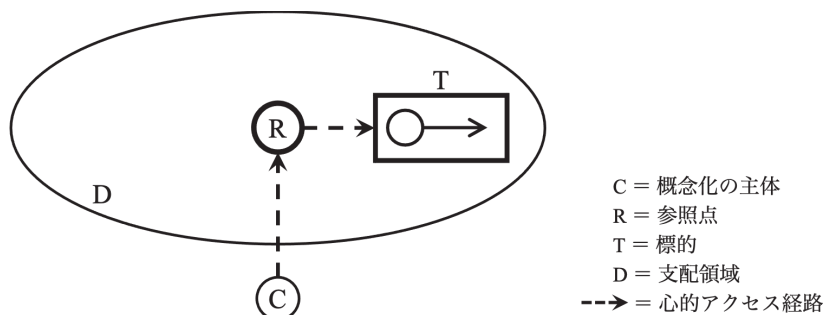


図3 トピック構文における参照点関係（Langacker 2003: 12 を参考に作成）

このように、標的である事柄（T）が、参照点（R）であるトピックを介してアクセス可能な知識領域（D）の中に位置づけられるのである。言い換えれば、トピックは概念化のための道案内の役割を果たす。例えば次の文では、*The lottery*（宝くじ）を参照点としてアクセス可能な知識領域の中のどこかに、標的である *I never have any luck*（私は全然ついてない）という事柄が位

置づけられるということが表されている⁴。

(8) The lottery, I never have any luck.

(Langacker 2009: 49)

トピックと節の表す事柄との間に具体的にどのような関係があるかは場合によって様々である。日本語の例で考えてみると、「この本は父が買ってくれた」ではトピックが節の項と一致しているのに対し、「魚は鯛がおいしい」では、トピックである「魚」と「鯛」の間にカテゴリーの上位・下位関係が成立している (Langacker 1991: 314)。次のカキ料理構文も、トピックである「カキ料理」を参照点としてアクセス可能な知識領域に、標的である「広島が(カキ料理の本場だ)」という事柄を位置付けるものと捉えられる。ここでの両者の関係は、「本場」が「カキ料理」に関連するものとして(つまりカキ料理の本場として)理解されるという関係である(詳しくは第3節を参照されたい)。

(9) カキ料理は、広島が本場だ。

= (1a)

トピック構文とは異なるが、次のような文の前置詞句も、後続する節の表す事柄への参照点として働いているものと見ることが可能である。

(10) In this book, there is a man who can fly.

一冊の小説は、現実世界の物体であると同時に、そこに描かれた架空世界の描写内容に対して場を提供する役割を果たす (Recanati 2000)。言い換えれば、ある小説を参照点としてアクセス可能な標的の一つに、そこに書かれた描写内容がある。小説は、架空の事柄が位置づけられる場を開くのである。通常解釈では不自然になる次の文が幼い洋子の見立てを述べた文として解釈された場合も、これと類比的に捉えることができる。

(11) ? 洋子は、これがヴァイオリンだ。

= (6b)

われわれは他者が心を持つことを知っている。他者による概念化の内容は、その人を参照点としてアクセス可能な標的の一つとみなせる。このように他者の概念化を概念化する「メタ概念化」のケースは第5節で詳しく扱う。小説世界で成り立っていることが現実にも成り立っているとは限らないのと同様に、他者の思い描く世界で成り立っていることが現実において成り立っているとは限らないということも私たちは知っている。この他者理解のモデルがこれらの周辺

⁴ このとき両者の間に具体的にどのような関係があるかは指定されておらず、文脈によって様々な解釈がある。宝くじに当選したことがないということだけでなく、宝くじの当選者と結婚できなかったことがないということや、宝くじの運営がうまくできたためしがないということも表現される (Langacker 2009: 49)。

的なカキ料理構文の基盤となっている。

3. 「非飽和名詞」とフレーム

3.1 フレームに基づく「非飽和名詞」の捉え直し

上述したように、西山（2003）は非飽和名詞を「Xの」というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延（extension）を決めることができず、意味的に充足していない名詞」（西山 2003: 33）と特徴づけている。「主役」について言えば、ある人が主役かどうかは「どの芝居（や映画）を問題にしているかを定めなにかぎり、なんともいえない」（西山 2003: 33）。これは「主役」「本場」などの名詞の一面を捉えたものではあるが、西山の考えには理論的および経験的な問題がある。

西山は、非飽和名詞とパラメータという概念は「意味論的」なものであるということを強調している。第一に、非飽和名詞かそうでないかはレキシコンの中の意味論的表示によって、二値的な値として指定されている（三宅 2000 参照）。第二に、「名詞「主人公」は芝居あるいは映画をパラメータに取る」などという形で、それぞれの非飽和名詞についてパラメータのタイプがやはりレキシコンの中の意味論的表示によって指定されている。第三に、非飽和名詞のパラメータの値を指定する表現「NP1のNP2」において、非飽和名詞NP2とそのパラメータNP1の関係は純粋に意味論的に決定されるものであり、語用論が介在する余地はないとされる。

認知言語学が一貫して明らかにしてきたことの一つは、言語的（辞書的）意味と百科事典的知識ははっきりと区別できないこと、そして言語的意味とされるものはむしろ、言語使用者の持つ言語に特化しない百科事典的知識を前提としてはじめて成り立つものだということである。以下では、西山が非飽和名詞と呼ぶものの示す性質を、このような百科事典的意味観の観点から捉え直すことを提案する。その際、フレームという概念を用いるのが有効である。例えば、「人質」という名詞の意味を把握するには、少なくともその背後にある「ある人が別の人に要求を受け入れさせるために、相手の大切な人を自らの支配下に置いて脅す」という複雑な状況の知識を持っていなければならない。このように言語表現の理解の基盤となるような百科事典的な知識構造をフレームという（Fillmore 1982, 1985, 西村 2002）。「人質」は概略このようなフレームを喚起（evoke）し、その中の特定の役割を指し示す（プロファイルする）と考えられる。

ただし、この例のように語彙項目が慣習的に特定のフレームを喚起するという面もあるが、それだけでなく、与えられた文の語彙項目に慣習的に結びついてはいなくても、文脈の中で言語使用者がフレームの知識を積極的に呼び出し（invoke）、それに照らして発話を理解するという面もある点に注意されたい（Fillmore 1982）。つまり同じ語彙項目でも文脈によって、異なるフレームの中で理解されうるということである。

非飽和名詞の一例とされる「主役」について考えてみよう。この語は、芝居や映画の中での人の役割を表す名詞である。芝居や映画が一般にどのようなものかについて、私たちはある程度の知識（複数の俳優がそれぞれ特定の役を演じること、主人公が存在することなど）を共有している。これを芝居フレームと呼んでおこう。名詞「主役」はこの芝居フレームを喚起し、

その中の特定の役割（主人公を演じる人）をプロファイルする。フレームの中の特定の役割をプロファイルするという事は、それに当てはまるかどうかは当のフレームの個々の事例（個々の芝居や映画など）に相対的に決まるということである。ある人が主役かどうかは「どの芝居（や映画）を問題にしているかを定めないかぎり、なんともいえない」（西山 2003: 33）のはこのためである。

したがってどんな名詞であっても、何らかの理由でフレームに相対的に用いられたときには、非飽和とされる名詞と共通する振る舞いを示すことになる。非飽和名詞と呼ばれてきたものは、フレームに相対的に用いられることが慣習化している名詞として認知言語学的に基礎づけることができる。同じ名詞でも場合によって異なるフレームに関連づけて理解されるため、フレーム相対性は西山の想定するほど固定的なものではないことになる。例えば、「カウンセラー」は職業を表す名詞であるため飽和名詞とみなされるが、「学校ごとに担当のスクールカウンセラーがいる」という学校に関するフレームが活性化している状況においては、各学校に相対的な役割として理解されるだろう。そのため、次のようなカキ料理構文の事例が可能になる。

(12) あその学校は、桜井さんがカウンセラーだ。⁵

上記の例 (4) 「このジャズバンドは、太郎がピアニストだ」も同じように分析できる。「ピアニスト」は、ジャズバンドのフレームと関連づけて理解されたときにはフレームに相対的な役割を指すのである（詳しくは 4.3 節で述べる）。非飽和名詞かそうでないかがレキシコンの中の意味論的表示によって指定されているとする西山（2003）の説では、このような柔軟な使用を扱うことができない。

また、ある種の比喩的な意味拡張によっても、名詞がフレームに相対的な役割を指して使われることがある。例えば、ある人について、「花子の ATM」（花子にお金を与える人）と言う場合、「ATM」はある人が別の人からお金をもらうというフレームの中の役割を指していると言える。ここでは、お金を下ろす機械を意味する ATM という語にもともと結びついていた人と機械との関わりのフレームが、人同士の関係へと転用されている。

3.2 「パラメータ」の問題

これを踏まえ、フレームおよび参照点の概念を用いて、「この芝居の主役」「太郎のおば」などの表現を考察しよう。これらは、西山が「非飽和名詞とそのパラメータの関係」と呼んでいるものである。このような「A の B」の A は、名詞 B の喚起するフレームの事例を特定して B のプロファイルする役割へとアクセスするための参照点として働いていると分析できる。具体例で説明しよう。「主役」は芝居フレームを慣習的に喚起し、その特定の役割をプロファイルする名詞であるため、ある人が主役かどうかを問題にするためには芝居フレームの具体的な事例

⁵ この例は木下蒼一朗氏による。

(個々の芝居や映画)を特定しなければならない。「この芝居の主演」の「この芝居」(A)は、芝居の事例を特定しており、それを介して、表現全体では芝居の事例の中の(「主演」(B)のプロファイルする)特定の役割へとアクセスしている。「おば」は親族関係フレームを喚起し、その中の基準になる人と特定の関係にある人物をプロファイルする。「太郎のおば」では、その基準を「太郎」が特定しており、それを参照点として太郎を中心とする親族関係へと至り、さらに表現全体ではその中の(「おば」がプロファイルする)特定の役割へとアクセスしている。

この種の「AのB」のAが参照点、つまりアクセスの手掛かりであると考え、ここに見られる意味的な柔軟性を捉えることができる。たとえば「妻」は夫婦関係のフレームを喚起し、その女性の方をプロファイルする。この語の場合、夫婦フレームのもう一方の要素である男性側を参照点とする「僕の妻」のような用法が典型的であろう。とはいえ、「あの夫婦は妻の方が背が高い」といった文では夫婦を直接指定しているし、「うちの妻」という言い方も可能である。単一のパラメータが意味論的に定められているという西山の考えでは、このような些細な柔軟性でさえ扱うことができない。「長男」が「この家の長男」「山田先生の長男」「3人兄弟の長男」といった複数の用法で使われることなども同様である。

また、手段・目的関係のフレームを喚起する「目的」という名詞は、「あの男が来た目的」のように連体修飾節でフレームを指定することもできるが⁶、「あの男の目的」のようにフレームの中の行為主体に当たる人を参照点としてフレームを喚起することもできる。行為のフレームにおいては行為者の際立ちが高いことを考えれば、行為者を参照点とすることは自然なことである。

また、「犯人」は事件のフレームを喚起する。典型的には「この事件の犯人」のようにフレームの具体例が直接指定される。しかし、テレビドラマ『古畑任三郎』では毎回事件が起こり、それを起こす犯人がいるという知識があれば、(13)のようにそれを利用して間接的にフレームにアクセスすることも可能であり、カキ料理構文を作ることもできる。「次回の『古畑任三郎』」は、事件フレームの具体例を特定するための参照点、手掛かりとして働いている。同様に、(14)では料理教室で特定の食材を用いて料理を作るという知識が利用されている。

- (13) a. 次回の『古畑任三郎』の犯人
- b. 次回の『古畑任三郎』は、松嶋菜々子の演じる人物が犯人だ。
- (14) a. 来週の料理教室の材料
- b. 来週の料理教室は、ふきのとうが材料だ。

西山(2003)にとっては、これらの例はカキ料理構文のZの位置の名詞は非飽和名詞であるが、Xはそのパラメータではないため、一般化の反例となる。西山はXとZの間に成り立つ非飽和名詞とパラメータの関係は意味論的關係であって語用論は介入していないと論じているが、こ

⁶ 連体修飾節を用いて非飽和名詞のパラメータの値を埋める現象は山泉(2010)で指摘され、詳細に論じられた。今井・西山(2012)、西川(2013)、山泉(2013)、氏家(2017)も参照。

これらの例では明らかに言語外的知識が関与している。フレームおよび参照点に基づく見方を取ることで、この現象は自然なものとして理解できる。

4. カキ料理構文

4.1 カキ料理構文の意味

先行研究におけるカキ料理構文の分析を改めて確認しておこう。カキ料理構文「X は、Y が Z だ」は、「Y が、X の Z だ」という形の対応する指定文を持つ。指定文とは、「あの男が犯人だ」のように、「犯人は誰かという、それはあの男だ」と言い換えられるような問いと答えの関係の一つのコピュラ文で表している文である。以下の (15a) が指定文であり、(15b) がそれに対応するカキ料理構文である。

- (15) a. 洋子が、この芝居の主役だ。
b. この芝居は、洋子が主役だ。

第1節で述べた通り、対応する指定文が成り立つ場合であっても Z の位置の名詞によってカキ料理構文が成り立たないことがあるという事実が、カキ料理構文が注目されてきた理由の一つである。たとえば次の Z が「首飾り」である場合には、指定文は成立するがカキ料理構文は成立しない。

- (16) a. これが、娘の首飾りだ。
b. ? 娘は、これが首飾りだ。

カキ料理構文を最初に詳しく論じた野田 (1981) は、Z の位置の名詞は X の「重要な一側面」を表す名詞であると一般化した。しかし、重要さが関与しているとは考えられない例が存在することを踏まえ、西山 (1990, 2003) は非飽和名詞という概念を提案し、Z と X の間に非飽和名詞とそのパラメータの関係が成り立っていなければならないと主張した。次のように Z の名詞が「電車」である場合、指定文は成り立つがカキ料理構文は成り立たない。しかし、「通勤電車」の場合にはどちらも成り立つ。これは「電車」は飽和名詞だが「通勤電車」は非飽和名詞だからだと説明される (西山 2003: 278, 279)。また西山によれば、名詞「弁護士」は弁護士を職業とする人という意味と特定の弁護を担当する人という意味があるため、「この町の弁護士」にはそれに応じた2通りの解釈がある。しかし、カキ料理構文では後者の解釈のみ可能である。これは名詞「弁護士」が後者の「弁護担当者」に相当する語義では非飽和名詞だからであると説明される (西山 2003: 279)。

- (17) a. ひかり 324 号が、洋子の {電車/通勤電車} だ。
b. 洋子は、ひかり 324 号が {?電車/通勤電車} だ。

- (18) a. わが町の弁護士は、山田だ。
b. わが町は、山田が弁護士だ。

先行研究の多くが、Z の位置に名詞一語が現れる例に注目し、その名詞の性質を論じているが、複数の語からなる句もカキ料理構文のZの位置に現れることにも注意しなければならない。山泉 (2010) は「唯一のN」が使われた (19) について論じている⁷。また、(20) のような例も作ることができる。

- (19) 私は、これが唯一の背広だ。 (山泉 2010: 47)
(20) このチームは、安中さんが唯一の女性だ。

(19) は、範囲を広げれば他にも背広はあるにしても、私の所有物の中では背広はこれだけだということを言っている。(20) は、このチームの外に目を向ければもちろん他にも女性はあるが、このチームの中に限定すれば、安中さんが唯一の女性だということである。第2節で、トピック構文の一種であるカキ料理構文においては、参照点であるトピックからアクセス可能な知識領域の中に節の表す事柄が位置づけられると述べたが、これらは指定文「YがZだ」の成り立つ範囲を、その知識領域（つまりトピックの支配領域）に限定していると捉えることができる。実は、これはカキ料理構文一般に当てはまる。カキ料理構文の意味として、次の仮説を提案する。

- (21) カキ料理構文「Xは、YがZだ」は、指定文「YがZだ」の表す事柄を、参照点であるトピックXからアクセス可能な知識領域において限定的に成り立つものとして提示する文である。

背広は多数存在するため、範囲を限定しなければ「これが唯一の背広だ」は成り立たない。しかし、「私」を参照点としてアクセス可能な領域（この場合話し手の所有物の集合）の中においては成り立つ。同様に、「このチーム」を参照点としてアクセス可能な領域（この場合メンバーの集合）の中においては「安中さんが唯一の女性だ」が成り立つのである。この見方を取ることで、Zの位置に西山のいう非飽和名詞が用いられるケースだけでなく、それ以外の名詞が用いられるケースも説明することが可能になる。

4.2 「非飽和名詞」が用いられるケース

まず、カキ料理構文のZの位置に西山のいう非飽和名詞が使われる場合を考えよう。カキ料理構文のZの位置にこの種の名詞が生起するケースが多いことは事実である。この種の名詞とカ

⁷ 菊地 (1997) も、Zの位置に生じる表現のリストの中に「唯一の」を挙げている (菊地 1997: 102)。

キ料理構文は相性の良さは何に由来するのであろうか。

第3節では、(i)「非飽和名詞」と呼ばれるものはフレームに相対的な役割を指して用いられることが慣習化している名詞であること、そして(ii)「非飽和名詞のパラメータの値を指定する」とされる「AのB」において、Aは(Bの喚起するフレームおよびBのプロファイルへと至る)参照点として働いていることを指摘した。例えば「主役」は芝居フレームを喚起しその中の特定の役割を指す名詞であり、「この芝居の主役」では「この芝居」が参照点としてフレームの事例を指定している。このことと上記のカキ料理構文の意味(21)を考え合わせると、非飽和名詞と呼ばれる名詞がカキ料理構文のZの位置に生じしやすい理由がわかる。

まず、カキ料理構文のトピックであるXは「YがZだ」の表す事柄への参照点として働いているため、Zの位置にフレームの特定を要する名詞が生じた場合には、そのフレームはXを参照点としてアクセスされ、「AのB」の場合と同じ参照点・標的關係が成り立つ。例えば「この芝居は、洋子が主役だ」において、「この芝居」(X)は「洋子が主役だ」という事柄への参照点となるため、「主役」(Z)の要求する芝居フレームの事例を特定するための基盤となる。つまり、この芝居の主役と理解されるのだ。さらに、Zがフレームに相対的な役割を表す以上、当然「YがZだ」の表す事柄はXからアクセス可能な領域において限定的に成り立つものになる。例えば、「主役」は個々の芝居によって相対的に決まるものであるため、「洋子が主役だ」という事柄は「この芝居」について限定的に成り立つことになる。以上のように、この種の名詞の意味とカキ料理構文の意味とが一致しているのである。この本質的な重なりが存在するために、カキ料理構文とこの種の名詞はきわめて相性が良いのだと言える。

4.3 「非飽和名詞」以外が用いられるケース

以上の見方に基づいて、「非飽和名詞」とは認められない名詞がZの位置に現れる例、つまり西山(2003)の一般化の反例となりうる例も説明することができることを以下で示す。

西山(2003)で挙げられている(山泉実氏の指摘とされる)次の例を考えよう。「ピアニスト」は飽和名詞とされるが、この文はごく自然である⁸。

(22) このジャズバンドは、太郎がピアニストだ。 = (4)

山泉(2010)も述べているとおり、これはフレームの概念を用いて説明できる。3.1節で、フレームの関与のしかたとして、言語使用者が自らフレームを呼び出し(invok)、それに照らして発話を理解する場合もあると述べた。ある語が関連づけられるフレームは文脈により異なりうるのである。次の例では「カウンセラー」という名詞が、「学校ごとに担当のスクールカウンセ

⁸ 西山は、一見したところ反例に思えるこの例について、「「ピアニスト」がこの語の字義通りの意味で用いられているのではなく、〈(バンドなどの)ピアノ演奏を受けもつひと〉の意味を表すものとして用いられた「言葉の緩い使用」である」と述べている(西山:2003:303)。ただし、この見解は近年修正されつつあるようである。4.4節を参照。

ラーがいる」という学校に関するフレームのもとで理解されることで各学校における役割とみなされている。

(23) あその学校は、桜井さんがカウンセラーだ。 = (12)

上記 (22) の例も同様に分析できる。「ピアニスト」は、「ジャズバンドにはピアノ担当者がある」というフレームのもとで理解されるときには、フレームの個々の事例に相対的に決まる役割として捉えられているのである。また、菊地 (1997: 105) では、「A 社は、P さんがエンジニアだ」という例が挙げられているが、この文が「各会社にエンジニアがいる」という想定のもとでは容認可能になることも同様に説明できる。また、西山 (2003) では、非飽和名詞説を支持するために提示された (18) の解釈の違いは、「弁護士」が職業の意味と弁護担当者の意味との2通りの意味を持つとすることで説明されている。しかしこの例も解釈の際に呼び出されるフレームの違いとして分析できる。

庵 (1995) は、西山の説の反例として「アイドル歌手」が用いられた次の例を挙げている⁹。「アイドル歌手」は常にパラメータを要求するわけではないため飽和名詞とみなせるが、「あの頃」をトピックとしたカキ料理構文の Z の位置に生起する。

(24) あの頃は山口百恵がアイドル歌手だった。 (庵 1995: 92)

本稿の (12) の考え方では、この例は問題なく説明できる。この文は、山口百恵がアイドル歌手だという事柄を、「あの頃」の指定する時間的範囲 (支配領域) の中で限定的に成り立つものとして提示していることになる。実際、「あの頃」の指定する範囲とそれ以外でアイドル歌手であるか否かは異なりうるため、この例は自然な文として理解される¹⁰。

また、すでに述べた通り、「机」が用いられた (25) や「ヴァイオリン」が用いられた (26b) は、X の人物がある物を Z に見立てているような状況では容認可能になる (ただし、(26b) はその状況でも容認できないとする話者もいる)。

(25) 実は、私はこれが机なんです。[貧しい作家がみかん箱を指して] = (5)

(26) a. これが、洋子のヴァイオリンだ。
b. ? 洋子は、これがヴァイオリンだ。 = (6)

⁹ 西山 (2013) は「あの頃は」を副詞として分析し、この文はカキ料理構文ではないとすることで問題を回避することを試みている。

¹⁰ 三好 (2017) は、カキ料理構文の Z の位置に非飽和名詞が生起する場合と飽和名詞が生起する場合があるとする立場を取っている。三好は飽和名詞と非飽和名詞の意味論的区別を認めた上で、臨時的なパラメータの導入を想定し、(24)–(26) のタイプの例を「合成的パラメータ補充」と位置付けている (三好 2017: 91)。この操作は「変域の拡張」によって起こると論じられているが、その内実には踏み込んでいない (三好 2017: 94)。

この例について西山は、「ヴァイオリン」が、関連性理論でアドホック概念構築と呼ばれる語用論的なプロセスによって臨時的に「～にとってヴァイオリンと見立てられているもの」という意味の非飽和名詞「ヴァイオリン*」へと臨時的に拡張されているという趣旨の説明を試みている（西山 2003: 299, 318）。これについては 4.4 節で論じる。

この種の例も、参照点であるトピック X からアクセス可能な知識領域において限定的に成り立つものとして指定文「Y が Z だ」を提示するという本稿の特徴づけが適用できる。これらにおいては、トピックの位置の人物の概念化そのものをメタ的に概念化していると考えられる。2.3 節で述べたように、他者による概念化の内容は、その人を参照点としてアクセス可能な標的の一つである。このような概念化は、ある主体の信念世界で成り立つことがその外でも成り立つとは限らないために、領域において限定的に成り立つものとして提示するカキ料理構文の意味に適合するのである。このメタ概念化と呼ぶべき現象の性格を第 5 節で詳しく論じる。

4.4 語用論的操作による説明について

西山（2003）は、カキ料理構文の Z の位置で「ヴァイオリン」が用いられた (26b) の例を、アドホック概念構築と呼ばれる語用論的操作により臨時的にパラメータが導入されると説明している。また、「ピアニスト」がジャズバンドのピアノ担当者の意味で使われる (22) の例も語用論的操作の結果パラメータを取っているのだとしている。しかし、梶浦（2013: 495）が指摘しているように、この説明には飽和名詞と非飽和名詞の区別が意味論レベルのものであるとする自身の主張と噛み合わないという難点があった。

梶浦（2019）は、語用論的に構築されたアドホック概念「ヴァイオリン*」はパラメータを取るものではないとする説を提案している。それを受け、西山（2021）では、語用論的操作によりパラメータが導入されることはないという原則を守る形で自説を修正している。しかし、「ヴァイオリン*」がパラメータを取る概念ではないのだとすると（すなわち「～の」という要素なしでも外延が定まっているとすると）、同じものが洋子にとっては「ヴァイオリン*」だが別の人にとってはそうではないという状況がどのようにして生じるのかを別の形で説明する必要があるだろう。また、語用論的操作によりパラメータが導入されないことがないという想定を帰結として、「ピアニスト」がジャズバンドのピアノ担当者の意味で使われる場合が西山（2021）ではレキシコンのレベルでの曖昧性とされている。つまり、心的辞書における「ピアニスト」という項目に、ピアノの演奏をなりわいとする人の意味と、何らかのグループでピアノ演奏を担当する人の意味が記載されているということである。しかし、本稿 (23) の「カウンセラー」が文脈の中で学校のカウンセラーとして解釈される例なども考えると、この種の例をすべて語彙的な曖昧性として分析することは非現実的である。このような困難は、意味論と語用論の二分法の想定に由来している。認知文法の立場では、そのような二分法を排し、言語記号の意味は使用における豊かな細部を含むものであると想定しているために、こうした困難は生じない。

5. メタ概念化

私たちは、自身の視座からだけでなく、他者の視座を介して対象を概念化することがある。たとえば、親が子供と話す際、自身を指すのに「お父さん」や「お母さん」を用いるのはこのような概念化である。親自身の視座からの（直接の）見え、というよりもその原点としての視座においては、自身は「私」と呼ばれるにふさわしいあり方をしているのであり、「お父さん」・「お母さん」という呼び方は、子供の視座に立って初めて得られる概念化を踏まえたものである。メタ概念化とはこのような、他者による概念化そのものを概念化することである。ただし、この際にも話し手が直接的に立っているのは話し手自身の視座であることに注意されたい。話し手はあくまでも話し手として他者の視座にアクセスし、そこから対象を概念化しているのである。

前節で触れたように次の例は話し手のメタ概念化を表している。この文の典型的な解釈は、「これ」によって指示される対象が、トピックとして提示された洋子の信念においてヴァイオリンとして概念化されているというものである。「これ」が話し手自身にとっても、ヴァイオリンである場合には洋子の視座を介して対象を概念化する動機が希薄になり、容認性が下がることになる。

(27) ? 洋子は、これがヴァイオリンだ。 = (6b)

ただし、話し手自身の概念化とメタ概念化が一致するとしても、なおメタ概念化を行う動機が存在する場合がある。次のような状況を考えてみよう。ある日突然、世界中の人がヴァイオリンをヴァイオリンとして認識しなくなってしまった。不安になった太郎は知り合いに、これは「ヴァイオリンだよな？」と尋ねて回る。何人もの人が「いや、ヴァイオリンではない」と答えたが、最後に会った洋子だけは「ヴァイオリンだ」と答えてくれた。太郎は胸を撫で下ろし呟く。

(28) よかった。洋子はこれがヴァイオリンだ。

このような状況では、洋子以外の視座からの見えと洋子の視座からの見えが異なり、話し手にとって洋子の概念化と自身の概念化が一致していることが重要な意味を持つため、自身の直接の視座からの見えにおいてもヴァイオリンである対象を、再びヴァイオリンとしてメタ概念化することが可能になるのである。

メタ概念化は、他者の視座を経由する場合にのみ生じるのではない。次の例は、話し手自身を対象としたメタ概念化を表す文と見なすのであれば、(洋子の事例と同程度には)容認可能である¹¹。

¹¹ ただし、図1に示したように、自身の視座からの見えには視座それ自体は含まれていない。そのため厳密に言えば、話し手自身を対象としたメタ概念化は、(仮想的なものであれ)他者の視座からの見えを経由している

(29) 私は、これが背広だ。

(山泉 2010: 47)

人は通常、自身の概念化と現実そのものをさほど区別せずに生きている。目の前に机が見えるのであれば、それは現実に机があるということだし、電車が走っているのが見えるのであれば、それは現実に電車が走っているということだろう。しかし同時に、それが自身にとっての現実には過ぎないということもまた理解されていなければならない。見間違いや記憶違いが生じる、すなわち現実をより正確に捉えなおすことが可能であるのも、現実そのものとその認識との区別が存在するからである¹²。「私」をトピックとしたカキ料理構文は、話し手の視座からの見えを（当座の）現実として直接に語るものではなく、話し手が概念化した話し手自身の視座からの見えというメタ概念化を表すものである。つまり、それが現実そのものではなく見えであることが明示されているのである。ある対象が背広かどうかは、通常、スピーチコミュニティの慣習によっていわば客観的（あるいは間主観的）に決定される。この文が通常不自然だと見なされるのは、「私」もまたスピーチコミュニティの一員である場合に、「これ」によって指示される対象が、自身の視座からの見えでは背広であると明示する動機が見いだせないからであろう。裏を返せば、客観的には背広とは見なされないと知りながら、私の視座を取れば背広なのだと伝えたいときにはこの文が自然に用いられることになる。

トピックに概念化の主体ではなく、時空間が現れる次の例もメタ概念化を表すものとして分析できる。山口百恵がアイドル歌手であるという見えは、あの頃の人々の視座からのものであり、これまでの事例と同じくメタ概念化を表しているものと考えられる。したがって、この文が発話された時点でも、山口百恵がアイドル歌手として認知されていたとしたら、話し手以外の視座を介した概念化を行う理由が失われるため不自然だと見なされるだろう。同様に、A氏は××県に暮らす人々の視座を介して初めて知識人として概念化されるのである。

(30) あの頃は山口百恵がアイドル歌手だった。

= (24)

(31) a. A氏は××県の文化人だ。

b. ××県はA氏が文化人だ。

(菊地 1997: 98)

参照点関係とは、一般化するならば、ある知識（参照点）を活性化することによって、別の知識（標的）にアクセスすることである。この関係は「太郎の妹」のようなフレーム（パラメータ）と非飽和名詞だけでなく、「太郎の車」のような関係にも当てはまる。両者の違いは、前者は太郎フレームにアクセスすることによって初めて、ある女性を（太郎の）妹として概念化できるようになるのに対し、後者は太郎フレーム（典型的には太郎の所有権）にアクセスせず

必要があると考えられる。

¹² Tomasello (2019: 第3章) は、客観的な現実という理解が可能になるためには、見かけの現実（それぞれの視座からの見え）が誤りうることを知っていなければならないと論じている。

とも対象を車として概念化できるという点である。

カキ料理構文の Z の位置に非飽和名詞と呼ばれる種類の名詞が現れる場合には、その慣習的な意味からして参照点の支配領域（フレーム）に相対的であるために、メタ概念化を表さない場合にも自然である。一方で、飽和名詞が現れる場合には、「Y が Z だ」の表す内容が何らかの理由で支配領域に相対的に成り立つこととして理解される場合にのみ初めて自然な文となる。その一つが、他者の視座を参照点としたメタ概念化を表す場合なのである。

6. おわりに

本論文ではカキ料理構文と呼ばれる「X は、Y が Z だ」という構文について、認知文法の立場から分析した。Z の位置に非飽和名詞が使われた場合にこの構文が成立するという西山(2003)の説が影響力を持ってきたが、それに当てはまらない例も多数指摘されていた。本論文が取り組んだのは、この構文の意味構造と、西山のいう非飽和名詞の特徴をそれぞれ考察することによって、どうしてこの構文に非飽和名詞が使われやすいかを説明すると同時に、そうでない名詞も特定の条件のもとで使用可能になるのはなぜかも説明するという課題である。

カキ料理構文と非飽和名詞の両方に人間の基本的な心的能力の一つと認知文法が想定する参照点能力が関わっていると提案した。カキ料理構文のトピック X は参照点として働いており、この構文は指定コピュラ節「Y が Z だ」の表す内容を参照点からアクセス可能な知識領域の中で限定的に成立するものとして提示する文である。そして、非飽和名詞とされる「本場」「主役」などの名詞は、フレームに相対的に規定される役割を表す名詞であり、そのフレームの事例を特定するために「～の」に当たる要素を参照点として要求する。この見方のもとでは、「この芝居は、洋子が主役だ」のような典型的な例は、Z の位置にフレーム中の役割を表す名詞が生起しているために、「洋子が主役だ」という事柄が「この芝居」に関する領域の中で限定的に成立するものとなるのだと説明できる。一方、非飽和ではないとされる名詞が使われている「このジャズバンドは、太郎がピアニストだ」「この学校は、桜井さんがカウンセラーだ」のような例では、Z の位置の名詞が文脈によって通常とは異なるフレームと関連づけられることによりフレーム中の役割として理解されていると説明することができる。また、幼い子供が板切れをヴァイオリンに見立てて遊んでいる状況を指して「洋子は、これがヴァイオリンだ」という例は、メタ概念化、すなわち他者の視座を介した概念化と分析できる。他者の信念世界で成り立つことはそれ以外の領域でも成り立つとは限らないため、「Y が Z だ」が当該領域で限定的に成立するものと捉えられるのである。このように、本稿の分析は特定の領域で限定的に成り立つという点に着目することによって複数の事例の共通性を捉えるものである。

西山(1990)は、この構文の成立条件を非飽和名詞(句)という新たなカテゴリーによって説明する仮説を提示した。これによって現象を明晰に捉えることが可能になり、分析が大きく進展することとなった。非飽和名詞というカテゴリーは「地図をたよりに構文」(三宅 2000, 氏家 2017)、「体目当て型複合語」(氏家 2019)など、複数の構文をかなりの程度適切に分析しうるものであり、その有用性は疑い得ない。しかしながら、元々の間であったカキ料理構文の成

立条件が、非飽和名詞という概念を導入するだけで直ちに解決するわけではないことに注意されたい。本稿で論じたように、この一般化には反例がいくつも発見されている。これらの反例（と見なされたもの）をも包括的に説明して初めて、適切な一般化が達成されることに疑いの余地はないであろう。Z に飽和名詞が現れるカキ料理構文という反例に対して、それは真のカキ料理構文ではないと言って分析対象の範囲を狭めることで対処するのは健全な態度とは言い難い。そのような態度は突き詰めれば、「Z に非飽和名詞が現れるカキ料理構文の成立条件は Z に非飽和名詞が現れることだ」というトートロジーに陥りかねないのである。

当然のことながら、共通点は相違点を脅かすものではない。西山による分析においても、飽和名詞・非飽和名詞というカテゴリーが、どちらも名詞であることを前提として立てられていることは明らかである。それぞれの典型例に目を向けると、飽和／非飽和という対立は自明のここのように思われるかもしれないが、飽和名詞と非飽和名詞の多義（e.g. 子供・弁護士）の存在が示唆するように、両者は実際には連続的、あるいは少なくとも移行可能なカテゴリーだと考えるのが無理のない想定であろう。カキ料理構文は飽和名詞のフレーム相対的な使用を含む点で、この連続性にかんする理解を深めるうえで格好の事例である。非飽和名詞の非飽和性は何に由来するのか。いまや私たちは、この間に向き合うべき地点に到達しているのではないだろうか。

参考文献

- Barker, Chris (2011) Possessives and relational nouns. In: Claudia Maienborn, Klaus von Heusinger, and Paul Portner (eds.) *Semantics: An international handbook of natural language meaning*, 1109–1130. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Fillmore, Charles J. (1982) Frame semantics. In: Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*. Seoul: Hanshin, 111–138.
- Fillmore, Charles J. (1985) Frames and the semantics of understanding. *Quaderni di semantica* 6, 222–254.
- 庵功雄 (1995) 「語彙的意味に基づく結束性について：名詞の項構造との関係から」『現代日本語研究』2: 85–102. 大阪大学.
- 今井邦彦・西山佑司 (2012) 『ことばの意味とはなんだろう』東京: 岩波書店.
- 梶浦恭平 (2013) 「「よい」の曖昧性とアドホック概念構築」西山佑司 (編)『名詞句の世界』471–495, 東京: ひつじ書房.
- 梶浦恭平 (2019) 「カキ料理構文における飽和名詞の非飽和化について」第 112 回慶應意味論・語用論研究会 (2019 年 9 月 1 日, 慶應義塾大学) 発表資料.
- 菊地康人 (1997) 「「カキ料理は広島が本場だ」構文の成立条件」『広島大学日本語学科紀要』7: 89–107.
- 小屋逸樹 (2013) 「固有名と(擬似)カキ料理構文」西山佑司 (編)『名詞句の世界』213–240, 東京: ひつじ書房.
- Kumashiro, Toshiyuki and Ronald W. Langacker (2003) Double-subject and complex-predicate

- constructions. *Cognitive Linguistics* 14: 1–45.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of cognitive grammar*, vol. 2, *Descriptive application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1993) Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4.1–38.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in cognitive grammar*. Berlin / New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2015) Construal. In: Ewa Dąbrowska and Dagmar Divjak (eds.), *Handbook of Cognitive Linguistics*. 120–143, Berlin: De Gruyter Mouton.
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』 東京: くろしお出版.
- 三宅知宏 (2000) 「名詞の「飽和性」について」『国文鶴見』 35: 89–79. [『日本語研究のインターフェイス』 東京: くろしお出版, 2011 に再録]
- 三好伸芳 (2017) 「カキ料理構文における「XのZ」の意味的性質」『日本語文法』 17(2): 81–97.
- 西垣内泰介 (2016) 「指定文」および関連する構文の構造と派生」『言語研究』 150: 137–171.
- 西川賢哉 (2013) 「非飽和名詞を主名詞とする連体修飾構造の意味表示」西山佑司 (編) 『名詞句の世界』 29–50, 東京: ひつじ書房.
- 西村義樹 (2002) 「換喩と文法現象」西村義樹 (編) 『認知言語学 I : 事象構造』 285–311, 東京: 東京大学出版会.
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室: 哲学者と学ぶ認知言語学』 東京: 中央公論新社.
- 西山佑司 (1990) 「「カキ料理は広島が本場だ」構文について: 飽和名詞句と非飽和名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 22: 169–188.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』 東京: ひつじ書房.
- 西山佑司 (2013) 「「あの頃のアイドル歌手」について」西山佑司 (編) 『名詞句の世界』 141–155, 東京: ひつじ書房.
- 西山佑司・西川賢哉 (2018) 「指定文の分析において「中核名詞句」なる概念はどこまで妥当か—西垣内 (2016) に対する批判的検討—」『言語研究』 154: 177–204.
- 西山佑司編 (2013) 『名詞句の世界』 東京: ひつじ書房.
- 西山佑司 (2021) 「カキ料理構文再考」第 130 回慶應意味論・語用論研究会 (2021 年 7 月 18 日, オンライン) 発表資料.
- 丹羽哲也 (2020) 「カキ料理構文の成立条件について—文末名詞文との比較」大阪市立大学国語国文学研究室 (編) 『文学史研究』 60: 56–70.
- 野田尚志 (1981) 「「カキ料理は広島が本場だ」構文について」『待兼山論叢 日本語学篇』 15: 45–66.
- 坂原茂 (1990) 「役割、ガ・ハ、ウナギ文」日本認知科学会 (編) 『認知科学の発展 第 3 巻』 29–66, 東京: 講談社.
- Tomasello, Michael. (2019) *Becoming human: A theory of ontogeny*. Cambridge: Belknap Press

- 坪井栄治郎 (2020) 「認知文法」坪井栄治郎・早瀬尚子『認知文法と構文文法』1-119, 東京: 開拓社.
- 氏家啓吾 (2017) 「「地図をたよりに」構文と非飽和名詞」『東京大学言語学論集』38: 287-301.
- 氏家啓吾 (2019) 「指定コピュラ文の意味構造をもつ NN 複合語の構文スキーマ: 外国人相手のビジネス、体目当ての男、野菜メインの食事」『日本言語学会第 159 回大会予稿集』446-451.
- 氏家啓吾 (2020) 「グラウンディングと日英語の名詞」『東京大学言語学論集』42: 297-309.
- 山泉実 (2010) 「節による非飽和名詞 (句) のパラメータの補充」東京大学大学院総合文化研究科博士論文.
- 山泉実 (2013) 「非飽和名詞とそのパラメータの値」西山佑司 (編)『名詞句の世界』11-27. 東京: ひつじ書房.
- Recanati, François (2000) *Oratio obliqua, oratio recta*. Massachusetts: MIT Press.

Cognitive Grammar Meets the “*Kaki-ryoori*” Construction

UJIIE Keigo and TANAKA Taichi

keigo5525@gmail.com, t.tanaka6002@gmail.com

Keywords: Cognitive Grammar, *kaki-ryoori* construction, unsaturated nouns, frame, meta-conceptualization

Abstract

This paper is intended to provide insight into what is known in Japanese linguistics as the *kaki-ryoori* (oyster dish) construction, so called because of its most famous example commonly glossed as [oyster.dishes TOP Hiroshima NOM best.place COP] (As for oyster dishes, Hiroshima is the best place), by examining from the viewpoint of Cognitive Grammar the semantic structure of this construction in relation to the semantics of the category of nouns that occur in the predicate position of its copular clause. Nishiyama (1990, 2003) argues that the position in question can be filled only by what he calls “unsaturated nouns,” each of which requires a parameter to be specified by the topic noun phrase. Though influential, this generalization is known to be subject to a number of counterexamples. We maintain that the topic in this construction serves as a reference point that affords mental access to the proposition expressed by the following copular clause, the function of the whole construction being to present the proposition as being true only in the domain of knowledge (referred to as “frame” in this paper) accessible via the topic. Coupled with our analysis of “unsaturated nouns” as designating roles in the frames they evoke, this reference-point account allows us to explain why nouns of this type are especially favored by the *kaki-ryoori* construction by viewing its topic as serving to help determine how the relevant frame is instantiated. It also has the advantage of being able to account for why a sentence like “Yooko wa kore ga baiorin da” [Yooko TOP this NOM violin COP], which Nishiyama cites as a counterexample to his analysis, is acceptable (provided that it is used in reference to a situation where a young child likens something as a violin), by analyzing it as adopting as a reference point the child’s perspective, from which the propositional content is viewed.

(うじいえ・けいご 東京大学大学院)

(たなか・たいち 東京大学大学院)